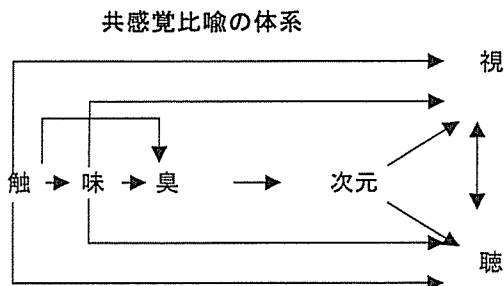


中国語の感覚表現 —— 接触感覚と遠隔感覚 ——

武田 みゆき

0. はじめに

国広 1989:30 は、日本語の共感覚比喩 (synesthesia metaphor) の体系を以下の図のように示し、共感覚比喩にみられる比喩の左から右への一方向性を、他の言語についても同じように認められるため、基本的には確立した現象とみてよいとし、その理由について言及している。¹



つまり、「一方向の右端に位置する視覚・聴覚の形容詞が、本来未発達で非常に貧弱であるために、他の感覚分野から借りるばかりで、それゆえ共感覚比喩に頼っている（国広 1989:30-31 要約）」としている。しかし、これは本当にそうであろうか。聴覚の形容詞についてはともかく、少なくとも性質・状態を表す日本語の「明るい」「白い」「美しい」などの「客観性形容詞」や、中国語の“大”“紅”“漂亮”などの「属性形容詞」のほとんどは、視覚の形容詞といってよく、決して未発達で貧弱とはいえない。さらに、視覚・聴覚に対するその他の感覚、つまり左端に位置する感覚、触覚・味覚・嗅覚の形容詞についていえば、触覚を表現する形容詞は、温度表現も含めれば豊富といえるかもしれないが、味覚を表現する形容詞は、「甘い」「辛い」「酸っぱい」「渋い」「苦

い」の他はほとんどなく、嗅覚に至っては、匂いが「よい」のか「悪い」のかに限定され、匂いを細分した形容詞はほとんどない。²したがって、左に位置する感覚の形容詞も豊富とはいえない。

また、国広 1989:31 は、視覚・聴覚が他の感覚より高度に発達しているにもかかわらず、その形容詞が「未発達」である原因は、視覚・聴覚は、働いていることが意識されない「遠隔感覚」であり、そのために言語面が発達せず、これに対してその他の感覚は、働いていることがはっきり意識される「接触感覚」であるためとしている。³そして、共感覚比喻は、「接触感覚」（その他の感覚）から「遠隔感覚」（次元も含む視覚・聴覚）への転用に単純化できると結論付けている。⁴しかし、国広のこの考えを取り入れれば、視覚・聴覚以外にも、感覚刺激が感覚器官と直接接しておらず、同じく働いていることが意識されないという理由で、嗅覚も「遠隔感覚」であるということになる。

楠見 1995:129-130 は、刺激と感覚器官との距離により、触覚・味覚は「近感覚」で、視覚・聴覚は「遠感覚」に分類できるとし、感覚形容語の転用の方向は、「近感覚」から「遠感覚」であるとしているが、嗅覚については言及がない。

以上のように、国広 1989 の知見は、共感覚比喻の一方方向性の説明において説得力がない。本稿では、主に中国語の感覚表現から、「接触感覚」と「遠隔感覚」について分析・考察し、特に国広 1989、楠見 1995 では明確に論及されていない、嗅覚の認知活動についても考察する。

1. オノマトペにおける味覚と嗅覚

山梨 1988:84 は、「ひりひり」「びりびり」「こったり」「ねっとり」などの味覚に関する形容は、基本的には、舌に対する触覚的な叙述であり、嗅覚に関する「鼻をつん／つんとつくような臭い」の表現と同じく、厳密には、味覚・嗅覚ともに触覚に基づいているとしている。この考えによれば、これらは接触感覚であるとみることができる。そこで、これら日本語の味覚・嗅覚を表現するオノマトペに相当する中国語の表現から、味覚・嗅覚が接触感覚であるかどうかを検証する。⁵

以下に示す中国語の表現に見られるように、日本語では擬態語を用いる表現も、中国語ではそれに相当する擬態語を用いない表現になる場合が多い。

（以下、中国語訳は、郭华江主编《新日汉拟声拟态词词典》上海译文出版社による。用例で出典のないものは、作例である。なお文中の下線は引用者による。）

よる。)

1-1 味覚

まず、日本語の味覚を表現するオノマトペに相当する中国語の表現からみ
てみる。

(1) 漬物の中の唐辛子をかんでしまったので口の中がひりひりする。

[嚼了一口酱菜里的辣椒，嘴里辣得发麻。]

(1) は、「ひりひり」は、「辣得发麻」と表現されており、「发麻」は舌に対す
る触覚的な感覚の叙述ではあるが、「辣得」とあくまで味覚表現であることを
示している。

(2) 山椒の辛さは舌の先にびりびりっとくる。

[花椒的辣味辣得舌尖麻酥酥的。]

しかし、(2) で「びりびりっ」は、「麻酥酥」と表現されており、完全に舌に対
する触覚的な表現となっている。

(3) 天气越来越冷了，脚放到水里去，冻得麻酥酥的。

[だんだん寒くなってきた。足を水の中に入れると、冷たくてしびれ
るようだ]

また、「麻酥酥」は、(3) のように、「冻得」と冷たさの程度を伴って叙述さ
れていることから、触覚的表現であるということが出来る。

(4) 私は、朝は大体軽おかゆなどを食べ、お昼と晩はこってりしたもの
をおかずを選ぶ。

[早晨我一般小吃些粥类，中午和晚上则挑些口味浓重的菜吃。]

(4) は、味覚表現「こってり」が、「浓重」を用いて表現されており、これは
触覚よりむしろ次元や視覚表現とみてとれる。これは日本語においても同様
の傾向がみられ、日本語の「こってり」は、触覚を表現すると同時に視覚も表
現する。これは、ある種の状態を視覚的に知覚する時に、それがあある種の感
触であることを経験的に知っているために、このように視覚表現によって触
覚表現が可能になるものと思われる。ここには、近接性に基づく換喩が作用

しているからである。したがって、ここでの“浓重”も一見視覚表現のようではあるが、厳密には舌に対する触覚表現によって表現されている。

(5) かすかに苦味があつて、そしてとろつと甘いチョコレート。

[巧克力稍带苦味，黏软香甜。]

(5) は、「とろつ」が“黏软”と表現されており、やはり触覚表現が用いられている。

以上のように、中国語においても味覚表現は舌に対する触覚表現をもとにしているといえる。

1-2 嗅覚

ここでは、日本語の嗅覚を表現するオノマトペに相当する中国語の表現からみしてみる。

(6) すっぱんが出たが、その首はまるで蛇のようだし、青臭い生臭さが鼻につんときて食欲が消えた。

[席上端出了甲鱼，它的头简直与蛇头无异，青草味的腥气刺鼻，顿时胃口全倒。]

(6) は、「つん」を“刺鼻”で表現しており、感覚刺激であるにおいが、鼻（腔）に接触していることを示しており、触覚に基づく表現といえる。

(7) 彼女とすれ違う時、香水の甘い香りがぷーんとにおう。

[跟她擦肩而过时，一股香水的芳香扑鼻而来。]

(7) は、「ぷーん」を“扑鼻”で表現しており、(6) の“刺鼻”より程度は怪しいものの、ある種のおいが感覚器官である鼻（腔）に接触する状態を示している。これも触覚に基づく表現である。しかし、“刺鼻”や“扑鼻”は、刺激であるにおいが、感覚器官である鼻（腔）に接触している「現象」を表現しているのみであるが、舌への触覚感覚とした“麻”や“黏软”は、刺激が感覚器官に接触した結果の舌の感覚を表現しており、“刺鼻”や“扑鼻”とは、性質を異にしている。ここでは、嗅覚器官の感覚は意識されていない。

(8) 父は酒のにおいをぷんぷんさせながら、帰ってきた。

[父亲喝得酒气熏人回家来了。]

(8) は、「ぶんぶん」を“熏人”で表現しており、感覚刺激であるにいが、感覚器官である鼻（腔）に接触しているかどうかは明白ではない。しかしながら、実際には、臭気が鼻（腔）に到達しているからこそ知覚することが可能であり、視覚活動において、網膜に像が映っているとは認知しないことや、聴覚活動において、鼓膜が震動しているとは認知しないのと同様に、嗅覚活動においても感覚の働きが認識されていないことがわかる。

以上のように、中国語において、嗅覚も触覚感覚に基づいて表現されているが、味覚刺激が感覚器官の働きを意識して知覚するのは異なる知覚である。

また、日本語でも、嗅覚表現である「つーん」「つん」は、触覚感覚に基づいていることを窺わせるが、「ぶん」「ぶんぶん」は、刺激の発生主体の状態を想起させ、刺激が感覚器官に接触しているという認識は薄い。

2. 感覚動詞 (Verb of senses) における接触感覚と遠隔感覚

視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚などの感覚を表現する中国語の動詞には、基本的に、“看（見る）”“听（聞く）”“闻（嗅ぐ）”“尝（味わう）”“摸（触る）”などが想起されるが、これらは感覚を能動的に獲得することを意味する他動詞である。

2-1 視覚・聴覚・嗅覚を表現する感覚動詞

実際に視覚・聴覚・嗅覚の感覚を人間が知覚していることを表すには、“看见（見える）”“听见（聞こえる）”“闻见（匂う）”などのように、表現されなければならない。

(9) 第一天，我看见了她，她在纺羊毛。她身后是蓝汪汪巨大的天空。（池莉《让梦穿越你的心》）

[一日目に私は彼女を見かけた。彼女は羊毛を紡いでいた。彼女の背後は、青々とした大きな空だった。]

(10) 她刚走进门，便听见麻将牌在桌子上磨擦的声音。（巴金《家》）

[彼女は、入って来てすぐに麻雀牌が机の上でこすれる音を聞いた。]

(11) 38楼人家都吃辣子。家里炒辣椒，闻见油锅味儿就要流眼泪。（王朔《看上去很美》）

[38号楼の人はみんな唐辛子を食べる。家で唐辛子を炒めるとき、

炒め油の匂いを嗅ぐと涙が出てしまう。]

(9)の“看见”は、私が彼女を見てその姿を「見かけた（確かに見届けた）」意味である。であるからこそ「彼女が羊毛を紡いでいた」ことが、わかるのである。(10)の“听见”は、麻雀牌が机の上でこすれる音を「聞いた（確かに聞こえた）」意味である。(11)の“闻见”は、炒め油の匂いを「嗅ぐ（確かに感知する）」意味である。つまり、(9)(10)(11)は、いずれも外界からの視覚・聴覚・嗅覚刺激を感覚フィルターを通して認知していることを表現している。これら視覚・聴覚・嗅覚を表す動詞には、必ず後置成分“见”が付加されなければならない。

- (9)′ 第一天, 我看了她、……
 [一日目に私は彼女を見た、……]
 (10)′ ……，便听麻将牌在桌子上磨擦的声音
 [……麻雀牌が机の上でこすれる音を聞く]
 (11)′ ……，闻油锅味儿……
 [……炒め油の匂いを嗅ぐ……]

(9)′の“看”は、彼女を「見る」行為であり、その姿を認知したか否かは不明である。同様に、(10)′の“听”は、麻雀牌の音を「聞く」行為であり、その音を認知したか否かは不明で、(11)′の“闻”は、油の匂いを「嗅ぐ」行為であり、その匂いを認知したか否かは不明である。以上のように、“见”を取り除くと、感覚を「知覚」することよりも主体の「行為」に視点が移動する。この時主体が感覚刺激である対象を認知しているかどうかは不明である。したがって、後置成分“见”は、感覚の認知活動に、なんらかの働きをしているとみなすことができる。

このことから、これら視覚・聴覚・嗅覚の感覚において、感覚刺激と感覚器官が直接接触しておらず、働いていることが意識されていない、遠隔感覚であるがゆえに、“看”“听”“闻”などの単なる行為の段階から、“见”を伴うことによって感覚が意識され、その結果認識したとみることができる。

2-2 触覚・味覚を表現する感覚動詞

一方、触覚・味覚を表す感覚動詞“摸”“尝”には、“听见”“看见”“闻见”に対応するような表現が存在しない（“*摸见”“*尝见”）。⁶これは、触覚・味

覚が、直接感覚刺激に接触して、同時に知覚してしまう接触感覚であるために、“一見”による意識確認の必要がないことによるものとみることができる。

(12) 我摸了摸他的脸，觉得有点儿发烧。

[私は彼の顔を触って、少し熱があると感じた。]

(13) 这时若是来了客人，主妇便笑嘻嘻地迎上去，请来客尝尝年糕，年糕是香是甜是粘就借别人的口鉴别出来。（《人民日报》1999.2.26）

[この時、もしお客がきたら、主婦はにこにここと迎え出て、お客にもちを味わってもらい、他人の口を借りて、もちがおいしいか、甘いかな、粘りがあるかをみてもらう。]

(12) では、私の手が“他的脸”に接触しているがゆえに、“发烧”と認知できるのであり、(13) では、“年糕”を口の中に入れて舌と接触させることによって、“香”であるか“甜”であるか“粘”であるかが認知できるのである。

2-3 文法関係と意味役割

“看+見”“听+见”“闻+见”が主体と感覚刺激の遠隔を意味し、“摸+ ϕ ”“尝+ ϕ ”が接触を意味するという捉え方は、中右 1994 が、英語の例より、「直接的に文法関係を結んだ述語と項の間には、その文法関係に平行して直接的な意味関係がある（中右 1994:330）」とする文法関係と意味役割の平行性とも符合する。つまり、(9)～(11)における“看+見”“听+见”“闻+见”の“看”“听”“闻”は、感覚対象である目的語の“她”“麻将牌在桌子上磨擦的声音”“油锅味儿”と直接的に文法関係が結ばれておらず、したがって意味関係も直接的ではなく両者の間に距離が存在するのである。これに対して、“摸+ ϕ ”“尝+ ϕ ”は、それぞれ直接的に感覚対象である目的語の“他的脸”“年糕”と文法関係を結んでおり、これに平行して意味関係においても直接的に結びつき、両者は接触しているのである。

以上のことから、触覚・味覚のみが接触感覚であり、嗅覚も含めた視覚・聴覚が遠隔感覚であるとみることができる。

3. 嗅覚の知覚活動

前節までの考察から、嗅覚も視覚・聴覚とともに遠隔感覚とみてとること

ができるが、視覚・聴覚との相違点、嗅覚固有の特殊性も看過することはできない。

3-1 視覚・聴覚との相違

日本語において、嗅覚を表現する「嗅ぐ」に対する自動詞として、「匂う」が存在するが、視覚（「見える」）・聴覚（「聞こえる」）と形態的に対応したものはない（「*嗅ごえる」）。この理由により、亀井 1996:230 は、嗅覚の感覚動詞は、触覚・味覚と同様に扱っている。

中国語においては、嗅覚の感覚動詞は“闻”であり、聴覚からの転用、もしくは聴覚との共有語であり、嗅覚独自の動詞は存在しない。⁷また、視覚・聴覚の感覚動詞である“看”“听”は、それぞれ、「読む・訪問する・判断する」「聞き入れる・従う」などの派生義になるが、“闻”のみは嗅覚としての派生義がなく、“看”“听”とは異なるふるまいをすることが窺える。

3-2 味覚との連続性

嗅覚は、味覚との連続性もみられる。

(14) 你做得菜味道很香。

[あなたの作った料理はたいへんおいしい。]

(14) でみられるように、中国語の嗅覚表現のひとつである“香（よい匂い）”は、派生義として味覚表現である「飲食物の味がよいさま」を表現することもできる。これは、よい味のする飲食物が、よい匂いであると感じ、匂いも食欲を満たす要素の一つになっている、同時性に基づく換喩が作用しているからである。この時、味覚と嗅覚の認識は連続的で、どちらの感覚によって快さを感じているのか明確でないことも多い。このことは、以下の例（15）からも窺える。

(15) 我去日本的时候, 喝过日本绿茶。日本绿茶很香。

[私は日本に行った時に日本茶を飲んだことがあります。日本茶は、とてもおいしい（香りがよい）。]

ここでの“香”は、日本茶の味と香りの総合的判断によるものと考えられることができる。

(16) 这两天胃口不好,吃饭不香。

[このところ食欲がなく、食事がおいしくない。]

(16) での“香”は、飲食物そのものの味のよさを意味しているのではなく、「食欲の有無」を意味しており、味覚のみの判断ではないことがわかる。

味覚と嗅覚の同時性に基づく換喩は、日本語の共感覚比喩とされている表現にもよくみられる。例えば、「あまいにおい」という表現は、イチゴやケーキなどの具体的な匂いを感知する時、同時に、その甘い味を想起してしまうことによる。匂い(嗅覚)に味(味覚)が必然的に付随してしまうのである。

山本 2001:51 は、味覚と嗅覚の関係について、次のように述べている。

香りには鼻の穴からクンクンと嗅ぐ香りと、口に入った飲み物、食べ物の香り成分がのどの奥から鼻腔に逆流するように入って感じる香りがある。飲食物の風味を感じる時は、この口の中から鼻に抜けてくる香りが重要だとされている。

つまり、味覚の知覚活動には、口から鼻に抜ける嗅覚が重要に関与しているのである。それゆえに、鼻をつまんだり、風邪などの理由で鼻がつまると、この逆流がうまくいかず、味覚の認知能力は低下する。

また、中国語の名詞“味儿”“味道”は、味覚・嗅覚の両感覚分野の意味をもつことなども考慮すると、味覚と嗅覚の関係は相当深い。この点において、小森 1993:59 の「人間の構造上、鼻と口とはつながっていて物理的にたいへん近い位置にある。現実のなかの隣接性によって結びついていると捉えたほうがよい」という指摘も首肯できる。

4. 結び

日本語のオノマトペに相当する中国語の表現から、味覚表現は、感覚刺激が感覚器官に接触して知覚する接触感覚であるが、嗅覚表現は、その働きが意識されない遠隔感覚であるとみなすことができる。このことは、嗅覚を表現する感覚動詞“闻”が、その感覚を知覚していることを表現するには、“看”“听”と同様に、後置成分“见”が付加されなければならないことから確認できる。

また、国広 1989 が、視覚と聴覚の感覚器官の働きが通常意識されていないことの依拠として内臓感覚のあり方と同様だとし、「支障のあるときにのみそ

の存在を意識している」と述べている。つまり、「目ざわり」「耳ざわり」という表現は、視覚・聴覚活動の不快感のみを意味するが、触覚・味覚表現である「手ざわり」「肌ざわり」「舌ざわり」「歯ざわり」は、接触感覚であり、通常意識されているために、快・不快の両方に用いられるとしている。

嗅覚においては、これらに対応する表現はない（*鼻ざわり）が、註2でも挙げたように、不快感を表現する中国語の表現は、“香味儿”“芳香”などのような快感覚の表現に比べてかなり多い。また、中立的な「匂い」を意味する“味儿”“味道”も、“香味儿”“臭味儿”のように、その匂いが「よい」のか「悪い」のかの判断表現を伴う場合もあるが、“有味儿”（不快な匂いがする）のように、単独で嗅覚を表す述語として用いられる場合は、必ず不快の意味である。日本語においても同様で、「匂い」は「よい匂い」「悪い匂い」のようにも用いられるが、単に「匂う」「匂いがする」といえば、不快な匂いを意味することが多い。以上の点においても、嗅覚は、視覚・聴覚と同様に、通常は、感覚器官の働きが意識されておらず、支障がある時に意識しやすいといえる。

しかしながら、嗅覚には、聴覚・視覚との相違点、味覚との連続性など、看過できない嗅覚固有の性格も存在するため、その扱いは慎重でなければならない。さらに各感覚の具体的表現を詳細に分析し、嗅覚表現と比較することが必要とされるが、今後の課題とする。

註

- 1 共感覚比喩について国広 1989:28 は、「ある感覚分野のことを表現するのに別の感覚分野に属する語を比喩的に用いることをいう」としている。
- 2 中国語の嗅覚表現には、“腥（生臭い）”“膻（羊肉臭い）”“臊（小便臭い）”“馊（ご飯がすえて臭い）”などがあり、日本語より細分されているようにみえる。しかし、これらは、“腥味”“臊臭”のように“一味”“一臭”を付加して表現されることが多く、やはりよくない匂いの具体的表現に過ぎず、嗅覚を細分した表現とはいえない。
- 3 遠隔感覚について国広 1989:31 は、認知科学の「外界投射」(projection to the outer world) を指す感覚心理学上の術語として使用している。本稿でもこれに従う。
- 4 国広 1989:31 は、その他の感覚に嗅覚が含まれているかについては言及がないが、文脈から、含まれていることがわかる。
- 5 本稿では山梨 1988:84 が、味覚・嗅覚表現としてあげているものに従った。

- 6 日本語においても触覚・味覚の「触る」「味わう」に対応する自動詞はみあたらず、複合表現として「感じがする」「味がする」が存在するのみである。
- 7 钱 1962:17 は、阮元のことばを引用して“古人鼻之所得，耳之所得，皆可借声闻以概之”としている。

引用文献

- 亀井孝他編 1996. 『言語学大辞典』三省堂
- 楠見 孝 1995. 『比喩の処理過程と意味構造』風間書房
- 国広哲弥 1989. 「五感をあらわす語彙—共感覚的比喩体系」『言語』大修館書店
pp.28-31
- 小森道彦 1993. 「共感覚表現のなかの換喩性」『大阪樟蔭女子大学英米文学会誌
pp.49-65
- 中右 実 1994. 『認知意味論の原理』大修館書店
- 山梨正明 1988. 『比喩と理解』東京大学出版会
- 山本 隆 2001. 『美味の構造』講談社
- 钱 钟书 1962. 〈通感〉《文学评论》第一期，人民文学出版社